

努力賞
(子どもの部)

「パパのかきの木」

荒川区立第二峡田小学校二年

小林 礼奈

三十五年前の八月十二日に日こうジャンボきというひこうきがついらくしました。そのニュースをテレビで見た母が、わたしにこの本をすすめました。

わたしもひこうきにのったことがあります、あんぜんなのりものだと思っていました。そのようなじこがあったことをしてこわくなりました。わたしの家ぞくがそのひこうきにのっていたとしたら、すごくかなしいです。なくなった人のこ

された家ぞくは、とてもかなしかったと思います。パパのシャツをだきしめてないでいる子どものすがたを見て、パパに会いたくてももう会えないことをつらく思いました。

パパと行って楽しかった海にこの後に行っても楽しくなかった場面を見て、パパが子どもたちにとってとても大切なそんざいだったと思いました。パパはしんでしまったけれど、かきの木から家ぞくを見まもっていました。パパのうえてくれたかきの木がはじめてみをつけたのを子どもが見つけた時、うれしかったと思います。かきは「パパからのプレゼント」です。

長い時間がたって、九さいと十三さいだった子どもたちは父親になりました。さい後のページでかきの木の前でみんなでわらっている絵を見て、

わたしはうれしくなりました。つらかったことをのりこえてまたえ顔ですごせていることにうれしくなりました。

作^やしは「ありきたりな日びがとっても大切」と書いていました。わたしもこの本を読んで、なに気ない毎日を大切にすごしたいと思いました。